

第4章 実施の効果とその評価

1 評価の観点とその方法

(1) 評価の観点

- ①年度当初の研究課題に基づいて実施したSSH事業が、生徒にもたらした効果について、次のような観点で評価を行った。
 - a. 自然科学や科学技術に興味・関心・意欲が増したか。
 - b. 理科や数学の理論・原理への興味が増したか。
 - c. 理科実験の興味が増したか。
 - d. 自分から取り組む姿勢が増したか。
 - e. プレゼンテーション能力が育成されたか。
 - f. 国際性（英語による表現力，国際感覚）が身についたか。
- ②1年間の取組が学校または教員にもたらした効果について、次の観点で評価を行った。
 - ア. SSHに取り組む中で、担当教科・科目を超えた教員の連携ができたか。
 - イ. 学校の先進的な科学技術や理科・数学に関する取組が充実したか。
 - ウ. 新しい理数のカリキュラムや教育方法を開発できたか。
 - エ. 将来の科学技術系人材が育成できたか。

(2) 評価の方法

- ①各事業ごとに実施した生徒へのアンケートと感想文などをもとに、生徒への効果を分析し、評価を行う。
- ②1月上旬に実施したアンケート（この1年間に実施したSSH事業に関する満足度を問うもの）をもとに、生徒への効果を分析し、評価を行う。
- ③SSH運営指導員会において事業報告を行い、指導助言をいただくとともに、校内のSSH委員会で意見交換を行い、様々な角度からの総括を行う。

2 各事業の実施効果とその評価

上記1 (1)にある観点を、

- a. (自然科学や科学技術に興味)
- b. (理科や数学への興味)
- c. (理科実験の興味)
- d. (自分から取り組む姿勢)
- e. (プレゼンテーション能力)
- f. (国際性)

のように略記する。

2-1 教科横断型授業「高津LCI」

一昨年度まで1年生SSコース生を対象として実施していた「高津LCI」は、昨年度よりの文理学科開設に伴い、文理学科生徒160名全員を対象に実施することとなった。この変更により昨年までと大きく異なる点は、

- ①限定された希望者（SSコース生）を対象とした授業から、学科に所属する生徒全員を対象とした授業になったこと。
- ②対象生徒が30名前後から160名に拡大したこと。
- ③対象生徒の進路希望が文系・理系の両方に跨がること。

の3点である。

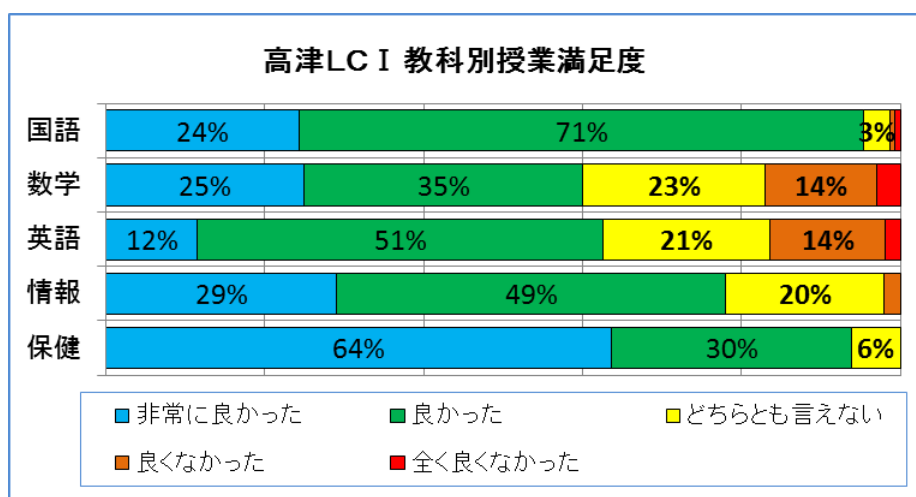
この大きな変更に対応するため、授業形態を次のように変更した。

- ①週2時間の授業を α と β に分け、さらに前・後期でローテーションすることで全体を4ブロックに分割して授業を実施
- ②4クラスに渡る時間割を出来るだけシンプルに編成するため、昨年度までの8教科10科目を横断させる授業形態から、国語・英語・数学と情報・保健の5教科横断とした。

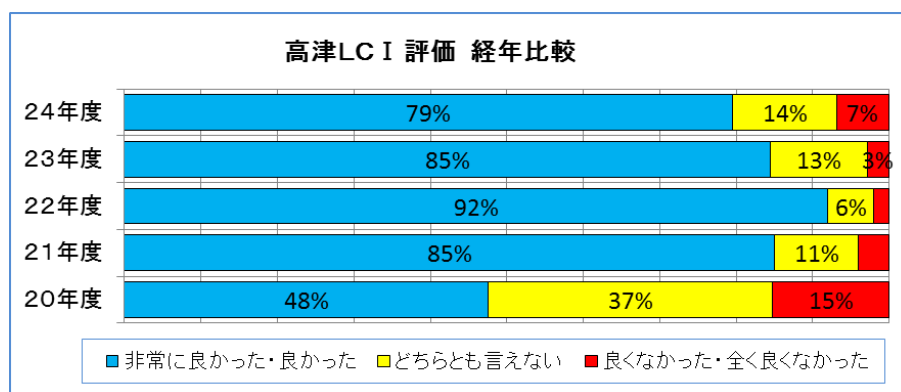
これらの大きな変更点が効果的に機能し、十分な成果を得ることが出来たかどうか等について、各教科の授業終了時に行ったアンケート結果と生徒の感想、担当教員の意見をもとに評価を行う。

(1) アンケート結果

各教科の取組について、生徒の授業に対する満足度を「非常に良かった」、「良かった」、「どちらとも言えない」、「良くなかった」、「全く良くなかった」の5段階で実施したアンケート結果を次に示す。



また、全教科平均におけるSSH指定初年度からの比較を次に示す。



(2) 分析と評価

まず観点別に見てみると、

- ①国語で行われた「小論文の書き方」の指導や情報の授業での「パワーポイントによるスライドショーの作り方」、英語での「英語によるディベート」の試みなどによって、観点 e. (プレゼンテーション能力) や表現力の向上について
- ②英語で行われた授業で、ALTの教員も加わった「話す・聞く・議論する」といった取組から、語学力を中心とした観点 f. (国際性) について
- ③数学の授業を通して、観点 a. (自然科学や科学技術に興味・関心・意欲) および観点 b. (理科や数学への興味) について
- ④すべての教科の授業で実習を多く取り入れたことで、観点 d. (自分から取り組む姿勢) について

それぞれの授業終了時に実施したアンケートに記入された感想文から、成果があったことが認められ、評価できる。

教科別に授業満足度を比較すると、情報・保健・国語といった実習を多く含む教科で『非常に良かった・良かった』が多く、数学・英語で評価が低いが、この傾向は例年見られるものである。また、全教科平均における評価の経年変化を見ると、昨年以降やや低下傾向にあり、文理学科全員を対象に実施するようになってから、40名規模での授業となっていることなどが影響している可能性がある。また、国語を除いて、毎年担当者が全員入れ替わっており、教材の内容以前に担当者の違いによる評価のブレが大きく現れている可能性が大きい。

この2年間は、すべての教科でほぼ同内容の教材を使用して「高津LC1」を実施し、その効果は2年次の課題研究に繋がっていると考えているが、次年度はSSH指定5年が終了し新たな年度に入ることもあり、新たな教科横断型授業のあり方を模索し、新しい教材の作成に努め、より一層の充実を図りたい。

2-2 課題研究「高津 LC II」

文理学科 2 年生への設定科目である「高津 LC II」2 単位は、昨年度の「高津 LC I」からの継続履修として、「理科」生徒 105 名は 13 班構成で月曜 6・7 限に、「文科」生徒 54 名は 8 班構成で水曜 3・4 限に実施した。

	講座名	人数	講座名	人数	講座名	人数		講座名	人数	講座名	人数
理科	数学A	17	化学B	7	家庭(理)	16	文科	国語	4	英語B	6
	数学B		生物A	10	美術(理)	2		社会A	6	家庭(文)	13
	物理	13	生物B	8	音楽(理)	6		社会B	7	保健(文)	2
	地球物理	8	地学	2				英語A	14	音楽(文)	2
	化学A	10	情報	6							

「理科」の各班においては、前期で課題研究のための基本的知識の習得を目的とした講義と実験、後期においては下記の研究テーマを設定して、課題研究を実施した。講座終了時に実施したアンケート結果と感想から評価を行う。

(1) アンケート結果

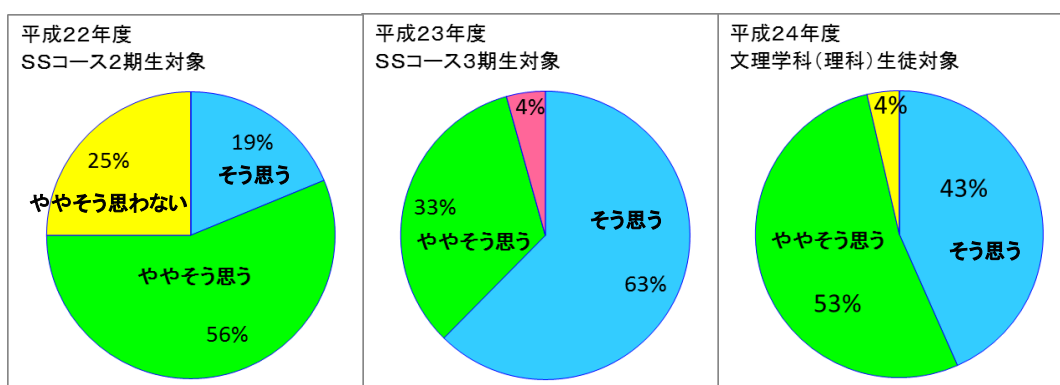
① 「高津 LC II」の活動を通して、以下の項目について、向上がありましたか。

1	理科・数学の理論・原理への興味	39%	50%	6%	4%
2	理科実験への興味	54%	35%	4%	7%
3	観測や観察への興味	48%	39%	1%	7%
4	自分から取り組む姿勢(自主性・挑戦心)	39%	47%	1%	7%
5	協力して取り組む姿勢(協調性・リーダーシップ)	48%	38%	1%	10%
6	粘り強く取り組む姿勢	40%	44%	4%	7%
7	独自なものを創り出そうとする姿勢	42%	38%	8%	7%
8	発見する力(問題発見力・気づく力)	39%	46%	6%	6%
9	問題を解決する力	39%	43%	8%	8%
10	真実を探って明らかにしたい気持ち(探求心)	52%	36%	3%	4%
11	考える力(洞察力・発想力・論理力)	48%	39%	1%	6%
12	成果を発表し伝える力(プレゼンテーション力)	49%	35%	1%	7%
	設問1~12の平均	45%	41%	3%	6%

■ 大変増した ■ やや増した ■ もともと高かった
 ■ 分からない ■ 効果がなかった

アンケート結果からは、すべての項目において肯定的評価が 8 割を越えている。「高津 LC II」の活動を通して、得るものが多くあったと感じていることが分かる。

②課題研究は、かけた時間に見合うだけの意義がありましたか？



平成22年度のSSコース2期生より、同じ設問でアンケートを実施している。経年比較では、最終年度である今年度の評価が昨年度より「そう思う」で20ポイント下げている。

(2) 分析と評価

本校における課題研究は、普通科希望生徒（SSコース生）対象に実施した2～4年次と、文理学科生徒全員を対象にした5年次とで、運営面で異なる点が多くある。

それぞれの運営上の長所短所の主なものは次の通り。

< 2～4年次のほうが良かった点 >

- 生徒の希望によって取り組むものであるため、生徒側に「覚悟」が備わっていて、なおかつSSコース生には運動部などの生徒が少なかったこともあり、放課後や休日の研究時間を取りやすい。
- コンパクトな班構成であったため、指導が行き届きやすい。
- 教室確保やPCの確保などの課題が存在しなかった。

< 5年次のほうが良かった点 >

- 多くの生徒教員で実施することにより、学校全体の取組として認識されやすい。
- 理数系分野でも、以前と比べて班の数が増え、とくに数学・情報分野の活動が充実したこと。
- 人文科学・社会科学系の分野でも課題研究が実施されるようになり、研究発表会がとても賑やかで盛りだくさんになったこと。

これらをふまえて今年度の取組について分析したい。

一番に挙げておきたいことは、対象生徒が文理学科全員となり、事業が拡大しても、内容が人数の増加に反比例するような結果にはなっていないということである。アンケート結果から見ても生徒自身の興味や姿勢や能力の向上に関する評価は薄まってはならず、むしろ以前より向上している。生徒にとってみれば、「大して期待はしていなかったが、やってみると意外に充実していた。」といったところであ

ろうか。また、最後の授業で記入したアンケートの記述内容も、SSコース生を対象として実施していた昨年度までと何ら遜色なく、「生徒の変容を目の当たりにできる授業」として、生徒にとっても教員にとっても意義の大きい2単位とすることができた。

アンケート結果①からも明らかなように、SSH事業とくに課題研究は、生徒に非常に多くの経験と能力向上をもたらす、極めて意義の大きい取組であるといえる。

本校SSH事業の成果観点に関しては、グラフからも明らかなように、a. (自然科学や科学技術に興味)、b. (理科や数学への興味)、c. (理科実験の興味)、d. (自分から取り組む姿勢)、e. (プレゼンテーション能力)の5つの観点について、大きな成果があったことが認められ、評価できる。

また、教員に対するアンケートでも、多くの教員が『大変増した・やや増した』と生徒の能力の向上について評価していることから、「高津LCⅡ」の取組を通じた成果が大きかったことが確認できる。

2-3 課題研究「高津LCⅢ」

SSコース3年生への設定科目である「高津LCⅢ」1単位では、2年次に実施した「高津LCⅡ」における研究をさらに発展・検証し、各自が論文にまとめて、研究論文集を作成した。

3年生で大学受験を控えたなか、時間割の外での取組ではあったが、後輩の2年生に自分たちの研究内容を引き継ぐべく実験方法を指導したり、LCⅡで行った実験データが不十分な部分を追試するなど、限られた時間の中でも精力的な活動が見られ、全員が論文作成を達成した。また一部ではあるが、学生科学賞などの校外の発表機会にエントリーする生徒もいた。

しかしながら、3年生には放課後にも土曜日にも進学に向けた講習が実施されており、そういう合間を縫っての実施であったため、生徒の積極性や活動への参加状態には大きな差異が生じたことも事実である。今後、文理学科生徒全員を対象とする「高津LCⅢ」を実りあるものとしていくために、各担当教員への連絡を密にし、時間割外の活動であっても全員が論文提出を果たせるよう、指導体制を充実させる必要がある。

2-4 大学・企業・公共施設などとの連携，地域連携，国際交流

A. 大学・企業・公共施設などとの連携

(1) 実施規模の拡大と生徒参加の活性化

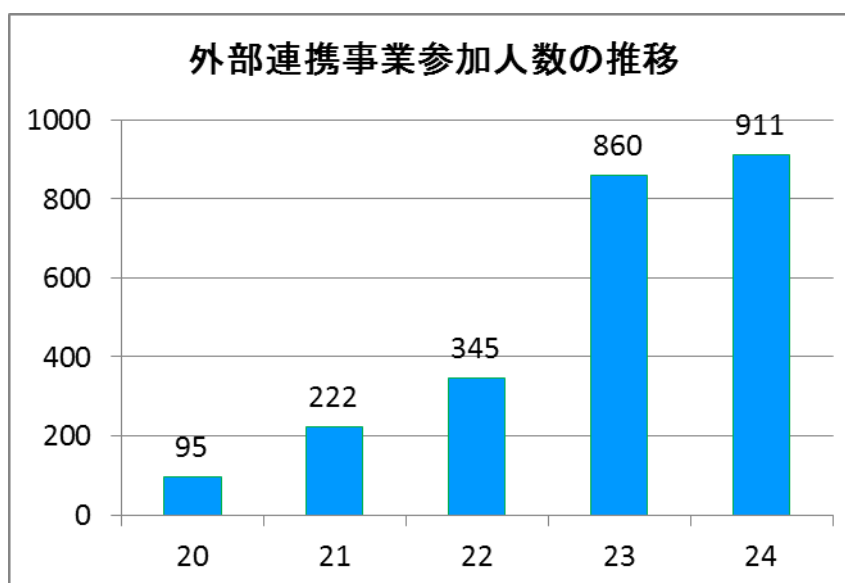
昨年度より本校における外部連携事業の実施形態を大きく変更した。主な変更点は以下の通りである。

- ①従来大部分の事業に関してSSコース生のみ案内してきたが、1・2年生全員を対象に実施している。
- ②本校における外部連携事業を「創造探究事業」と称し、理数系の事業だけでなく文科系の事業も数多く実施することとした。このうち理数系の分野に関わるものをSSH事業に位置づけた。

これらの変更は、SSH主対象生徒を今年度入学生より文理学科生徒としたことが主たる理由であるが、その結果次に示すように事業規模が大きく拡大し、参加の活性化に繋がった。

- ①1年間で約60の外部連携事業を企画あるいは生徒に紹介した。
(うち理数系の約40事業をSSH事業として位置づけ)
- ②①のうち、43の事業に生徒の参加が得られ、参加者実数は延べ911名(うち理数系の事業には662名が参加)

SSH指定5年間における外部連携事業は、主対象生徒の変化と拡大とともに、多様化と参加者数の増加が続いており、多くの生徒に知的好奇心の芽生えや進路意識の向上を促している。



平成24年度 外部連携事業参加者一覧（自然科学系事業のみ掲載）

事業名	参加人数
4/29 市大理 市大授業	42
4/30 大阪大 情報科学	16
4/30 大阪大 免疫研	23
4/30 大阪大 レーザー研	43
6/14 下水道科学館見学	54
7/29 京大工学部 工学のいま	47
8/9 京大工学部 見えないものを見る	67
8/7～8/8 SSH東京研修	20
8/7～8/10 コアSSH韓国	18
7/14 京大再生医科学研究所公開講座	1
7/16 大阪市立科学館七夕講演会	3
7/31～8/3 神戸大学海事科学部公開講座	2
7/27～8/17 阪大基礎工	23
7/22 阪大基礎工	2
随時 ときめきひらめきサイエンス	30
7/21 神大理学部サイエンスセミナー	2
7/28 京大 高校生のための化学	1
7/29府大 高校生のためのマテリアルサイエンス入門	6
7/30,318/1,2 8/6,7 Kan-Dai-3セミナー	12
8/3 京大医学部 放射能って何だろう	5
8/4 市大 高校生のための先端科学研修	37
8/6 阪大 蛋白質研究セミナー	1
8/6 阪大 現代数学への冒険	7
10/3 企業見学 協和(株)ハイポニカ実験農場	25
10/29 サイエンスデイ	76
10/30 大阪大学学術研究機構会議サイエンスカフェ	4
12/15 京都大学キャンパスガイド	50
2/9 進学指導特色校発表会	45
合計	662

その他、人文・社会科学系の事業が15、参加者総数は911名

（3）分析と評価

- ①母集団の拡大に伴う参加者の増加により、SSH事業に関わった生徒数が大幅に増加したこと自体が、まずは大きな成果であったと言える。とくに、3年次までほとんどゼロであった、SSH主対象生徒以外の生徒の参加が4・5年次においては100名を越えたことは大いに評価できる。
- ②アンケート結果については概ね良好で、とくに「参加して良かったか」の問いについては、9割以上の生徒が肯定的な回答をし、3分の2の生徒が「そう思う」と回答していることから、本事業の意義が大きいことが伺える。
- ③企画別に見ると、講義のみの企画よりも、実習を含む企画や見学を含む企画のほうがいずれの項目でも評価が高い。生徒は、やはり参加型・体験型の企画の方に魅力を感じているようである。今後も生徒が能動的に関わることの出来る事業を企画・紹介していきたい。
- ④今年度より文科系分野の企画についても多数取り組んだが、文系学部の講義の受講や博物館の見学、裁判の傍聴などさまざまな企画への参加を通して、将来理数

系への進路目標を有する生徒にとっても、知識や経験の厚みを増すことができた
と考える。

また、アンケート集計や生徒の感想文に基づいて、観点別に見てみると、

ア. 大学との連携では体験授業・講演・実験・実習を通して、企業・公共施設との
連携では施設見学を通して、観点 a. (自然科学や科学技術に興味)、観点 b. (理
科や数学への興味)、観点 c. (理科実験の興味) について

イ. 実験・実習に参加することで、観点 d. (自分から取り組む姿勢) について
それぞれ成果があったと評価できる。

B. 地域連携

SS 研究グループとして活動している生物研究部ならびに化学部が、文化祭での
研究発表ならびに実験教室を実施した。

とくに実験教室は地域の子どもたちや中学生にも大変好評であった。これらの取
組は、科学的な活動を通して外来者と積極的に関わることが求められ、観点 d. (自
分から取り組む姿勢) などに成果があったと評価できる。また、地域の子どもたち
に対して、理科実験への興味・関心を高めるための取組としても、成果があった。

C. 国際交流

今年度の国際交流については、コアSSHとして取り組んでおり、第6章以降で
詳細を記述している。

2-5 科学オリンピックへの参加

物理・化学・地学・数学の各オリンピック国内予選会に、物理18名、化学4名、
地学1名、数学9名が参加した。

<分析と評価>

今年度も延べ32名が科学オリンピックに挑戦した。このうち地学オリンピック
予選に参加した1名が本選に参加することになった。多くの生徒が挑戦したことは、
観点 b. (理科や数学への興味) および観点 d. (自分から取り組む姿勢) において
成果があったと評価できる。

本事業については、今年度は数学を除いて1年生には積極的な案内をしなかった。
ほとんどの理科の科目を2年生から選択履修する本校においては、1年生はいうま
でもなく2年生でもほとんどの問題が、授業で今後習う範囲からの出題となり、個
人的に科目内容への関心が極めて高く、独自に学習を進めている生徒でない限り、
高得点は難しい。そのような理由から、参加することの意義が実感できる2年生に
絞って参加させた。参加した生徒の感想からも「難しかったが解いていて楽しかった」、
「問題を解いたことで未知の化学分野に対する好奇心が高まった」など肯定的
な意見が多く見られ、次年度以降も2年生に参加を促していくことの意義は大きい
と考える。

3 SSH事業全般がもたらした効果について

SSH事業が、この5年間で実施した各事業に対する成果だけでなく、全体としてどのような成果をもたらしているかについて、毎年12月に実施している「SSH事業実施にかかる意識調査」および本校独自のアンケート結果を資料として検証をおこなう。

(1) SSH事業の「生徒への効果」について

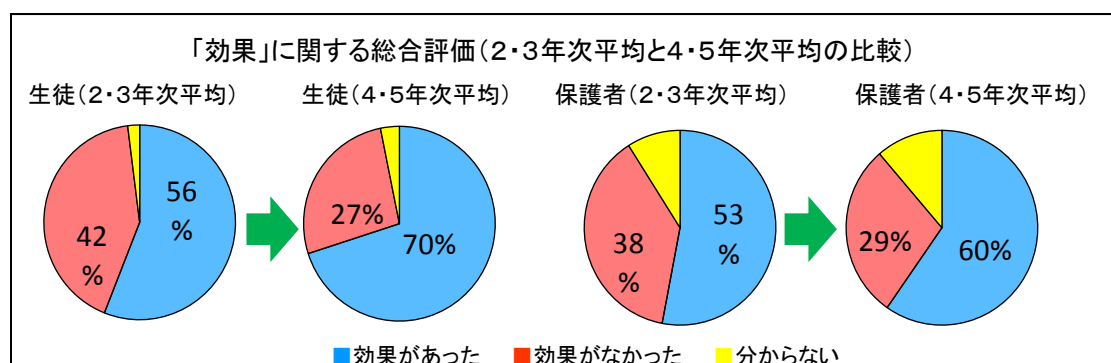
① アンケート結果

次の6項目について、生徒・保護者に対して行ったアンケート結果を以下に示す。

(1)理科・数学の面白そうな取組に参加できる(できた)	生徒	74%	24%	
	保護者	66%	24%	
(2)理科・数学に関する能力やセンス向上に役立つ(役立った)	生徒	65%	32%	
	保護者	53%	35%	
(3)理系学部への進学に役立つ(役立った)	生徒	60%	37%	
	保護者	56%	34%	
(4)大学進学後の志望分野探しに役立つ(役立った)	生徒	76%	22%	
	保護者	61%	29%	
(5)将来の志望職種探しに役立つ(役立った)	生徒	69%	28%	
	保護者	54%	35%	
(6)国際性の向上に役立つ(役立った)	生徒	65%	32%	
	保護者	55%	34%	

■効果があった ■効果がなかった ■分からない

上記6項目の平均値について、指定2・3年次の平均と指定4・5年次の平均を比較することで、主対象生徒が普通科SSコース生(学年30名程度)であったときと、文理学科生徒(学年160名)となったあとでの変化について分析・考察する。



② 分析と評価

結果からも明らかであるように、SSH事業が理科・数学に関する能力の向上のみならず、将来の進学や就職に関しても、多くの生徒・保護者が「効果があった」としており、事業の成果があったことが分かる。1年生においては、大学や企業・公共施設との連携事業、2年生ではさらに課題研究を加えた取組の成果が大きいこ

とを示している。

また、経年変化を見ると、この項目に関しては2・3年次の平均と比較して4・5年次の平均が上昇している。これは過去の経験を踏まえた、より効果的な校内SSH事業が展開できており、成果があがっていることの現れである。

(2) 生徒の「興味」の向上について

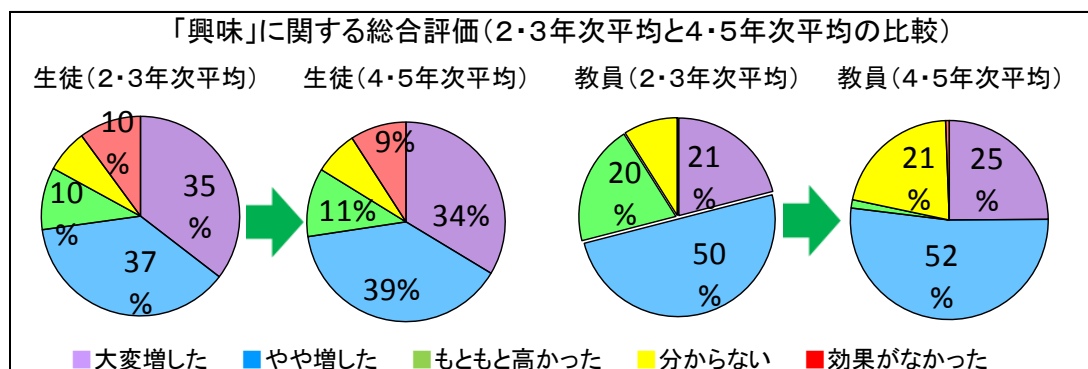
① アンケート結果

次の5項目について、生徒・教員に対して行ったアンケート結果を以下に示す。

(1)未知の事柄への興味(好奇心)	生徒	33%	45%			
	教員	41%	53%			
(2)理科・数学の理論・原理への興味	生徒	28%	43%	16%		
	教員	18%	71%			
(3)理科実験への興味	生徒	35%	35%	17%		
	教員	41%	24%			
(4)観測や観察への興味	生徒	28%	42%	19%		
	教員	29%	41%			
(5)学んだ事を応用することへの興味	生徒	28%	43%	18%		
	教員	12%	71%			

■大変増した ■やや増した ■もともと高かった ■分からない ■効果がなかった

上記5項目の平均値について、指定2・3年次の平均と指定4・5年次の平均を比較する。



② 分析と評価

「元々高かった」を含めると、約85%の生徒が肯定的な回答をしている。一方で教員の(3)(4)の項目に関する評価では否定的な回答が多く、指導する側が要求しているほど生徒の反応が良くないことを示している。

今年度は文理学科生徒全員による課題研究の実施初年度にあたり、とくに教員の目から見て、昨年までのSSコース生に比べると、「実験・実習時にやや目の輝きに欠ける」感じが見て取れたのではないかと考える。

ただ、2・3年次平均と4・5年次平均との比較では、データに有意な差はなく、

文理学科生徒全員参加による「高津LCⅠ」や「高津LCⅡ」においても、生徒の興味関心は以前と引けを取らないレベルで維持できていることが分かる。

(3) 生徒の「取り組む姿勢」の向上について

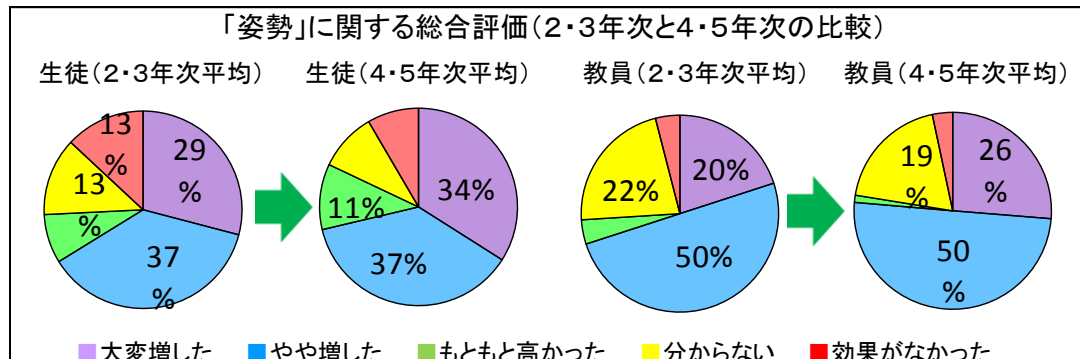
① アンケート結果

次の5項目について、生徒・教員に対して行ったアンケート結果を以下に示す。

(1)社会で科学技術を正しく用いる姿勢	生徒	23%	39%	20%		
	教員	6%	41%	12%		
(2)自分から取り組む姿勢(自主性、やる気、挑戦心)	生徒	28%	44%	17%		
	教員	41%	47%			
(3)周囲と協力して取り組む姿勢(協調性、リーダーシップ)	生徒	31%	41%	16%		
	教員	65%	29%			
(4)粘り強く取り組む姿勢	生徒	28%	41%	15%		
	教員	41%	53%			
(5)独自なものを創り出そうとする姿勢(獨創性)	生徒	30%	40%	15%		
	教員	18%	76%			

■ 大変増した ■ やや増した ■ もともと高かった ■ 分からない ■ 効果がなかった

上記5項目の平均値について、指定2・3年次の平均と指定4・5年次の平均を比較する。



② 分析と評価

「姿勢」については、全項目で8割以上の生徒が「大変増した」「やや増した」「元々高かった」と回答しており、5年間で最も高い評価となった。とくに、「(2)自分から取り組む姿勢」、「(3)周囲と協力して取り組む姿勢」、「(4)粘り強く取り組む姿勢」および「(5)独自なものを創りだそうとする姿勢」について、教員の評価が非常に高く、「高津LCⅠ」での教科横断型授業や「高津LCⅡ」での課題研究を通して、生徒の変容が見られたことがよくわかる。

一方で、「(1)社会で科学技術を正しく用いる姿勢」に関しては、教員の回答に「分からない」が多く、科学における倫理観の育成を重視した取組の実践が必要である。

また、下の円グラフからも、文理学科全員参加となったあとでも、生徒の取組に対する姿勢は退行することなく、むしろ向上していることが伺え、今後の本校における事業展開に明るい展望を持つことができる結果である。

(4) 生徒の「能力」の向上について

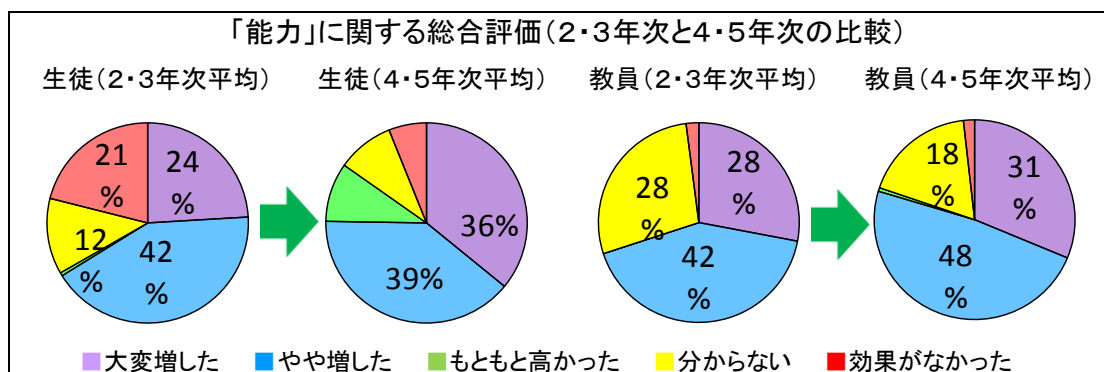
① アンケート結果

次の5項目について、生徒・教員に対して行ったアンケート結果を以下に示す。

(1)発見する力(問題発見力、気づく力)	生徒	27%	44%	15%	
	教員	12%	82%		
(2)問題を解決する力	生徒	25%	46%	17%	
	教員	24%	71%		
(3)考える力(洞察力、発想力、論理力)	生徒	32%	44%	14%	
	教員	35%	59%		
(4)成果を発表し伝える力(レポート作成、プレゼンテーション)	生徒	37%	39%	16%	
	教員	76%	12%		
(5)国際性(英語による表現力、国際感覚)	生徒	27%	30%	27%	
	教員	12%	29%		

■ 大変増した ■ やや増した ■ もともと高かった ■ 分からない ■ 効果がなかった

上記5項目の平均値について、指定2・3年次の平均と指定4・5年次の平均を比較する。



② 分析と評価

「能力」に関しても、各項目で9割前後の生徒が肯定的に回答しており、過去5年間で最も良い自己評価となっている。1年生での教科横断型授業や2年生での課題研究、外部連携事業の経験を通して、通常授業だけでは培うことの難しい種々の能力が伸長できたのではないかと考える。

また、教員の評価では、「(1)発見する力」「(2)問題を解決する力」「(3)考える力」で教員の肯定的評価が生徒の評価を上回っており、SSH事業を通じて生徒の能力が向上していることを、指導する教員の側も実感できていることを示している。

一方で、「(5)国際性」に関しては、教員のアンケート回答者が理科・数学科に偏っているため、国際性を高める取組を実施していることは知りつつも、それを実感する機会に乏しかったのではないかと分析するとともに、より一層成果が見える形で国際性を養う取組を実践していかなければならないと考える。

4 5年間の取組が、生徒および学校・教員にもたらした効果について

今年度は、従来のSSH事業での成果とノウハウを活用して、将来文科系への進路希望を持つ生徒を多数含む文理学科生徒160名を対象に学校設定科目「高津LCⅡ」を実施し、全員が課題研究に取り組んだ。また、進学指導特色校として昨年度から全校生徒を対象に新たに実施した事業や、文理学科生徒を主たる対象として実施した「創造探究事業」においても、これまでのSSHでの経験が効果的に活かされ、学校全体として「発見する力」「問題を解決する力」「考える力」「表現し伝える力」「国際性」などを培うための多様な取組が展開できた。

これらの成果はSSHとしての取組にも還元され、主対象生徒以外の生徒のコアSSH事業や東京合宿への参加、さらにはJSTが主催するサイエンスキャンプへの参加など、取組の裾野が広がっていることが実感できる。今や本校ではかつて無かった様々な事業が、「どこまでがSSHの範疇なのか区別できない」状況で多種多様に展開されており、多数の教員と多くの生徒がそこに関わっている。

本校のSSH事業は文理学科設置によって事業の拡充を図ることに成功した。この成果が、本校生徒ならびに本校教員にもたらした効果は、この章で述べてきたとおり絶大である。今後は数多ある課題の解決に取り組み、更なる充実発展をめざして次の5年に向かって前進する。